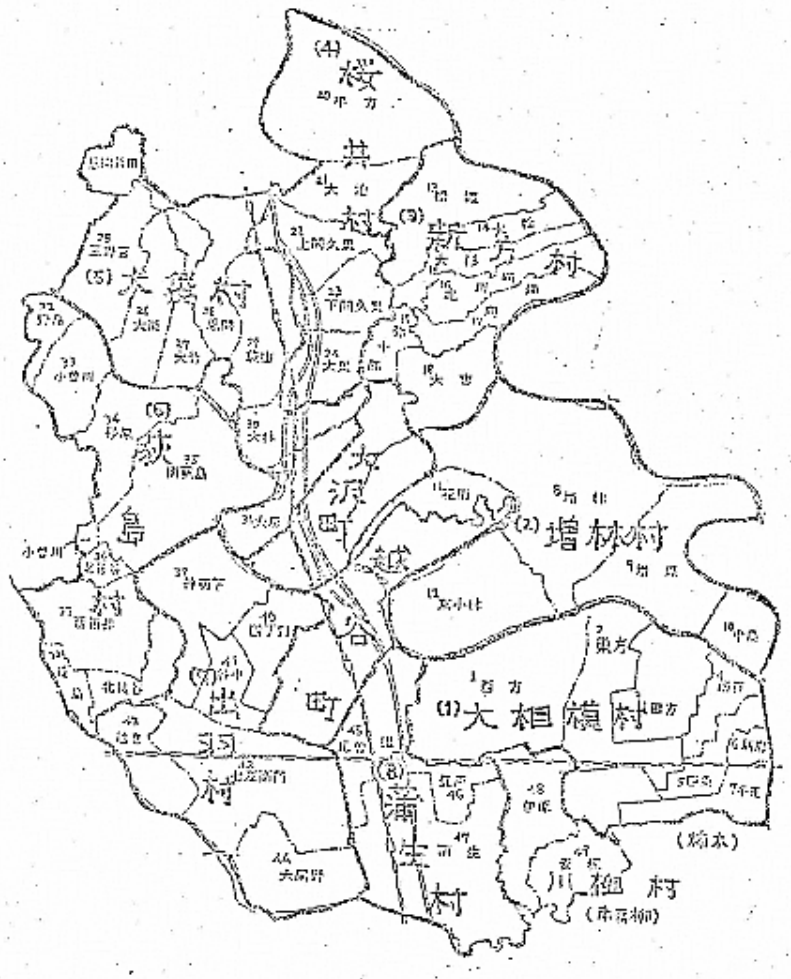
第19回 市民文化祭

越谷市郷土研究会 出品紹介



62年度

市民文化祭 出品目録

越谷市郷土研究会

番号	出品者	電話	題名
1	石塚吉男	74-2217	虫追い（川崎神社）
2	加藤幸一	74-0344	大相模不動明王瑞像記（大聖寺）
3	木原徹也	64-2111 環境保全課	江戸時代の越谷宿
4	中村忠夫	62-3429	享保6年御鷹場高札（越谷市郷土資料収納館）
5	星野昌治	0473 51-0417	板碑二題
6	本間清利	62-0210	清蔵院山門の龍
7	丸田富夫	03-969-3441	光明真言塔（玉泉院）
8	宮川進	75-9139	奈良・平安時代の越谷
9	山田政信	03-917-6004	和讃地蔵（清蔵院）
	木原徹也		越谷全図 1～9 所在地明示

1.

北川崎の虫追い

石塚　吉男

虫追いは、古代より稲作の普及に伴い、自然発生的に起ったもので、戦前は何処の地方でも農村の年中行事の一つであった。

地方によっては、害虫の発生をある怨霊のたたりとして、宗教的に盛大に行なう虫送りもあるが、越谷地方の虫追いは夜間行われ、各農家が麦藁で作ったたいまつを夕方鎮守の社前に持ち寄り豊作祈願の後、神燈よりたい

まつに共太して、鉦太鼓を先頭に、稲の虫ホイホイと囃立てながら字境まで練り歩くもので、戦前は一村挙げて同夜に行ったので村の耕地は一面火の海のごとき壮観を呈したというが、戦後の極端な農薬の使用と急速な開発のため虫追いの行事は殆ど姿を消した。

越谷市では市東北の北川崎地区にかみその行事が続き、県の無形文化財として、毎年七月二十四日の夜行なわれ往時を偲ぶよすがとなっている。

連絡先 TEL 0489-74-1221

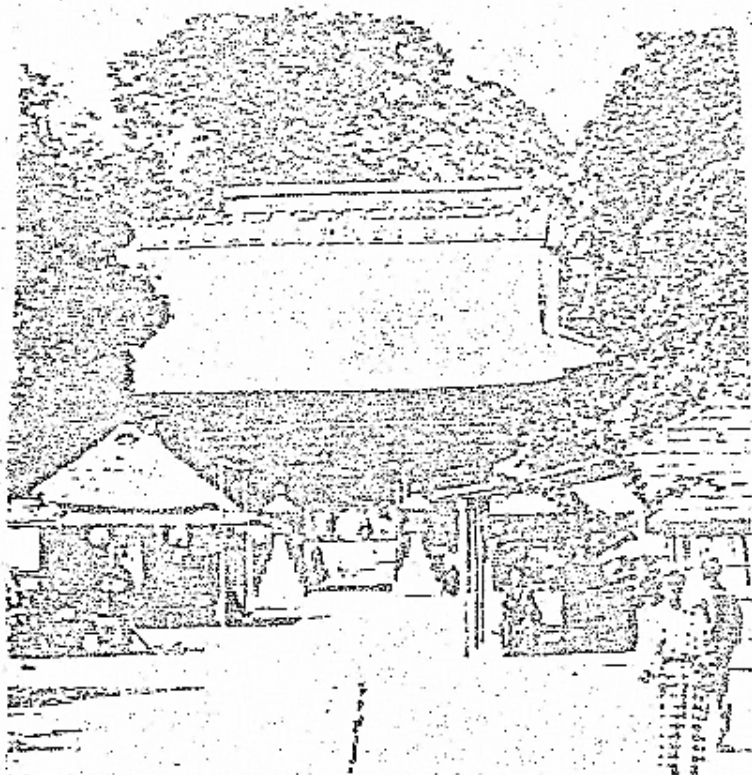
武州大相模不動明王瑞像記（真大山大聖寺）

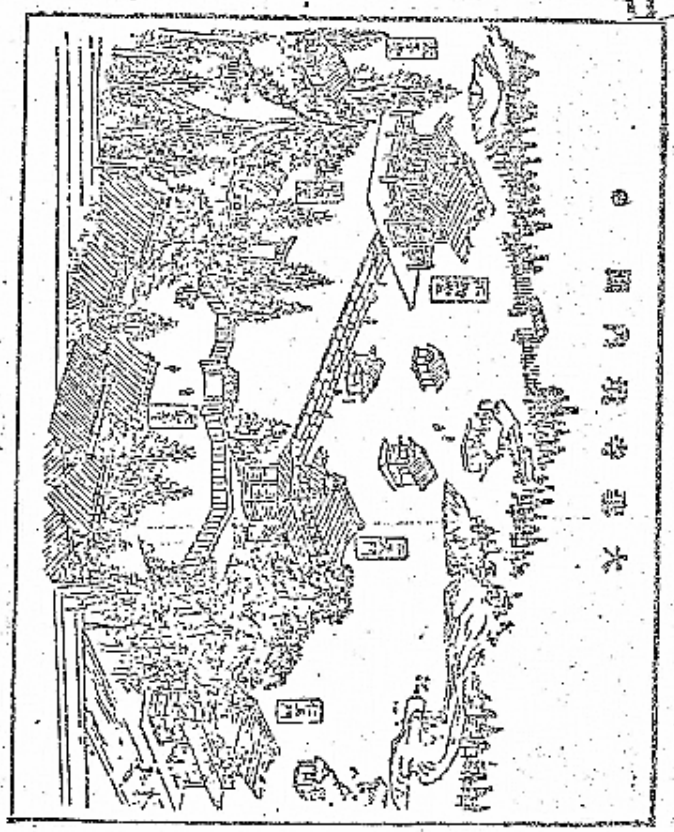
上の写真は西方の真大山大聖寺に現存している縁起状。当時の住職英山の依頼によって享保十四年（一七二九）八月に江戸の宝林山霊雲寺第三世の慧曦が文を作り、光天が書いたものである。「武州埼玉郡大相模郷の真大山は不動尊の霊域で瑜伽の清い土地でもある。もと寺誌一巻があった。その文、わずか十余紙。惜しくも寛文年間（一六六一～七二）に紛失した。曽てこの古誌を読んだ者が語る処によると、昔、奈良にいた良弁僧正は……」（大意）と続き、不動坊の起こりを述べる。次に天文年間（一五三二～五四）に起きた盗賊と家鳴不動の命名のいわれ、その後の岩付城主太田資正及び北条氏繁の崇信。天正十二年（一五八四）に紀州根来寺の性盛の弟子定伝が当山の住職となる。同十九年十一月に家康より六十石を喜捨され、寺号が大聖寺となる。

のち定伝は慶長二年（一五九七）に京都の醍醐寺の座主義演のもとで奥義を伝授。同五年、家康は小山で石田三成の挙兵を聞き、兵を江戸に向けて引き返す途中で当山に立ち寄り戦勝祈願した話。享保五年（一七二〇）住職隆元の時に火災に遇った話のあとで、正徳五年（一七一五）の仁天門建立と天和元年（一六八二）の観如法師の東照宮の話が続く。最後に現住職英山の祈願により参詣者に手や口を清めるための水が湧き出た話と「瑞像記」を作るにあたってのことが書かれている。

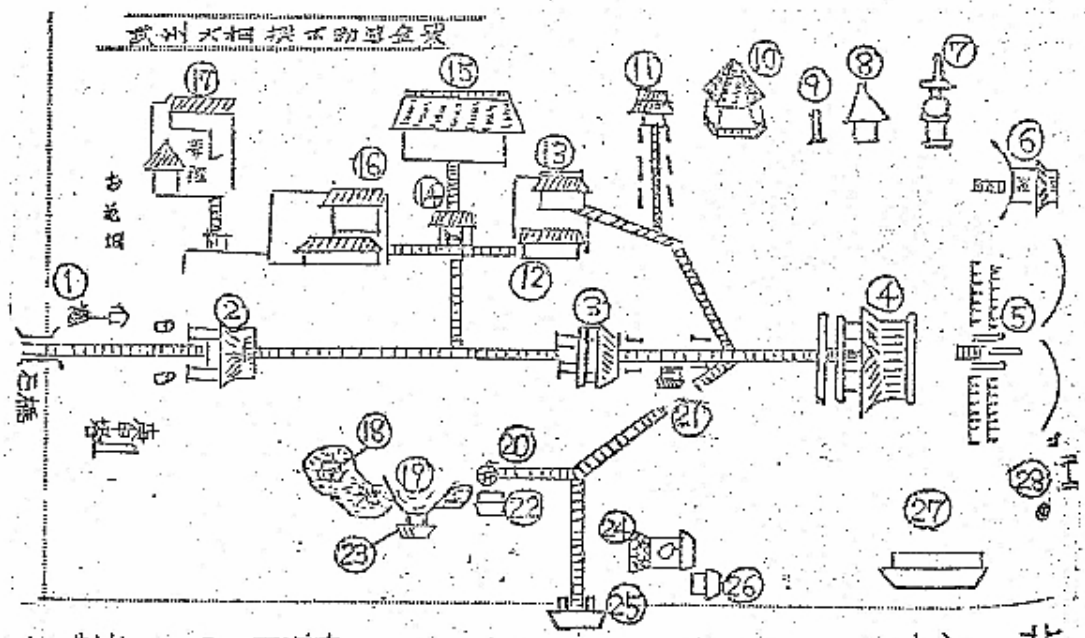
左の写真は明治二十二年に焼失する前の仁天門の様子。枠外両脇には「真大山仁王門原景」「大正五年十一月複写」との添え書きがある。仁天門奥には瓦葺きの本堂が見え隠れしている。この「瑞像記」によると、楼上には釈迦三尊と十六羅漢像が安置され、門の両脇には持国天と多聞天（毘沙門天）の二天像が

置かれている。なお、明治二十二年十月九日、門前町内の山崎湯屋より火災が発生し、十七軒の建て物を焼き尽すとともに、この仁王門の茅葺き屋根に飛び火して全焼。この時、二天像の眼が宝石でできていると言われていたため、乞食坊主の太助が火の中に飛び込み、眼を取ろうとして焼け死んでいる。



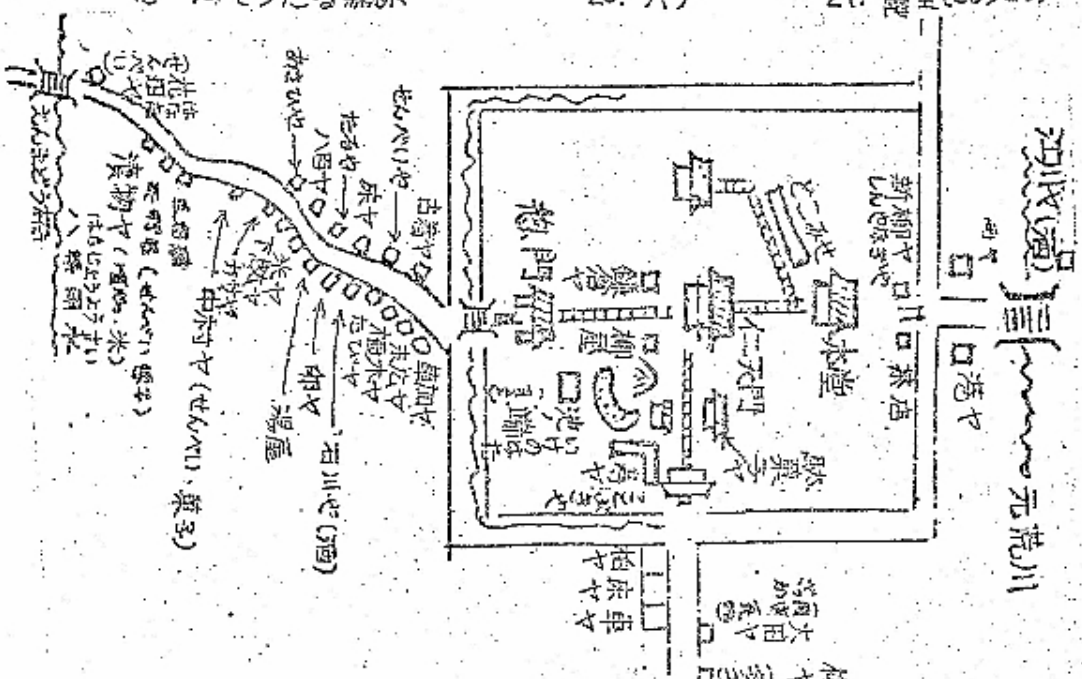


文政11年(1828)完成の「新編武蔵風土記稿」



1. 制札
2. 惣門
3. 仁王門
4. 本堂
5. 百度申
6. 天満宮
7. 宝篋印塔
8. 太子堂
9. 供養塔
10. 経蔵
11. 東照宮
12. 番所
13. 宝蔵
14. 黒門
15. 講堂
16. 利性院
17. 書院ならびに庫裡
18. 弁才天
19. 愛宕山
20. 井戸
21. 水屋
22. 滝ノ坊
23. 北向不動
24. 鐘楼
25. 東門
26. 地蔵坊
27. 護堂(にもりどう)
28. 裏門

※民家・茶店・大木を除く
Iは 光明灯
境内周辺及び西、北は大木を交えたうっそうたる森林



上記二つの資料は「越谷市の史蹟と伝説」(S35発行)の中の高崎力先生の資料から取りました。

市内平方 会野川 加藤幸一

3.

江戸時代の越ヶ谷宿

木原徹也

この写真は、江戸時代後期（一八世紀末）頃の越ヶ谷宿の様子を描いた絵図を写したものです。

この絵図は、当時の道中奉行が管理していた全国の主要街道について、実地調査を行い作成したいわば官製の街道絵図です。この内越ヶ谷宿の部分を複写いたしました。この絵図は距離一里（約三九二七米）を七尺二寸（

約二一八・二糎）に縮少されており、縮尺は一八〇〇分の一であり、道路の曲折から方位までも正確に記されています。

越ヶ谷宿は、街道に沿って両側に大小さまざまな家が軒を接して連らなり、土倉造りや二階建ての家も見られ大層繁栄した様子がうかがえます。また大沢町との町境を流れる元荒川の流れや、これに架る大沢橋、そして町並みの東裏には立木に囲まれた久伊豆神社と天岳寺の境内も見られ、さらにゆったりと広

がる瓦曽根の溜井も良く判ります。

写真からは細か過ぎて良く読みとることは出来ませんが、絵図を詳細に見ると、宿場で旅人や荷物の取継ぎを行なった「問屋」が本町の東側町並に在ったことや、大沢橋のたもとには高札場が在ったこと等も判る貴重な絵図です。

江戸時代の旅は、二〜三里（八〜十二キロ米）ごとに設けられた宿場を目当てに、一歩一歩足を進めたわけで、宿場は旅人の休息の

No. 2

場所として、又宿泊の場所として旅の疲れを癒す大切な場所でした。また街道に設けられた松並木や道標そして一里塚などは、旅人を風雪から守り、心の張り合いともなり、旅行の安全を託した重要なものであり、絵図の隨所に描かれています。

連絡先TEL 047/22/0634

上段

4.

鷹場高札

定

在々にて若鉄砲打候
もの有之候ハヽ申出べし并
御留場之内にて鳥を取
申もの捕候欤見出し候ハヽ
早々申出べし急度御ほうび
可被下置者也

享保六年二月

下段

解説

中村忠夫

享保元年（一七一六）紀伊藩主吉宗が江戸域に迎えられ八代将軍を継ぐと、それまで中断されていた鷹場制度を復活させ、その制度や組織をより強化していった。鷹場とは江戸よりおよそ一〇里四方を禁猟区に設定し、鷹場に関するさまざまな制約を付したものである。この中には将軍家鷹場、紀伊家など御三家鷹場、鷹の調練場である鷹匠頭支配の捉

コクヨ ケ-16 20×20

飼場が設けられ、それぞれに警察的職能を持った鳥見などが配置された。このなかで幕府は享保六年、鷹場村々に御鷹場法度高札を掲げさせたが、この高札はその一つである。これにはもし村々で鉄砲を打った者がいたときは申出ること、また御留場（鷹場）で鳥をとった者、あるいはこれを見出したときは早々申出ること、申出た者にはきつとほうびをとらせるであろうしとの旨が述べられている。つまり鷹場では許可を得た者以外は鳥を

とったり、鉄砲を所持したりすることはできなかったのである。

連絡先TEL
0489
162
3429

コクヨ ケ-10 20×20

No.

5. 板碑二題　　屋野昌治

元来、板碑は卒塔婆の一種で、板仏とか石仏とかよばれ、埼玉県文化財保護委員会などでは板石塔婆の名称を用いている。関東地方、とくに武蔵の板碑は秩父山地の緑泥片岩、いわゆる青石で作られているから、青石塔婆ともよばれる。しかし、全国各地に広く分布する板碑がすべて青石であるわけではない。

その大体の形としては、上端がとがり、その下方に二条の横線が切り刻まれているため、

頂部は三角形になっている。その下に礼拝対象となる仏を梵字で示したり、画像で現わしたりする。たまには、名号（南無阿弥陀仏）や題目（南無妙法蓮華経）を刻むこともある。これは造立者の信仰によって異なるわけだから、これによって当時の信仰がわかる。その下方には、必ずといってよいほど、造立年月日が刻まれている。時には、信仰する経典から抜き出した偈文（げ）、また造立者や被供養者の名、造立趣旨を刻むこともあり、梵字の真言

No.

や供花の図を刻むものもある。

裁谷市の板碑は、現在のところ、数百七基が調査の結果、確認されている。

右の板碑は、大相模大聖寺（明応八年）のもの、左の板碑は、大相模南百（文明十二年）のもので、しかも、阿弥陀三尊を表したものである。

6. 蒲生清蔵院山門の龍

李間清利

この龍は蒲生清蔵院山門の蟇股（かえるまた）に彫刻されている龍です。伝えによるとこの龍は日光東照権現社（後の東照宮）の造営にあたった飛騨の名工左甚五郎の作で、夜な夜な山門を抜け出しては田畑を荒らすため、外に出ないように金網で囲ったといわれます。実はこの龍が彫られた山門は、その棟札から寛永十五年（一六三八）二月に建立されたことが知れま

す。この工匠は明瞭には読みとれませんが、和泉国（現大阪府の南部）「井ノ乃久次郎立花家次」とあります。おそらくこの工匠も日光大権現社の造営にあたった一人とみられますが、その日光への往返に清蔵院に立寄ったことでしょう。このとき山門の造立を頼まれ、権現社の竣工（寛永十二年）後、再び薄生を訪ずれ山門を建立したものとみられます。ちなみに清蔵院の近くに「えびすやし」と「大黒やし」という屋号をもった家がありますが、

いづれも左甚五郎の作といわれる木彫りの「えびず」と「大黒」を家宝としてもっています。きっと清蔵院の山門を建てたとき彫ってもらったものでしょう。この清蔵院の山門は数少ない古い頃（三五〇年前）の建築物として市の文化財に指定されています。

連絡先TEL 0489-62-0210

7.

光明真言塔

丸田　富夫

この石塔は市内南荻島の玉泉院境内にあり、蓮花の上に円形を描き、その円縁に沿って三十四字の光明真言種子を刻み、その中央に胎蔵界大日報身真言を十字形に刻んでいます。

周囲の光明真言は、大日如来への祈願であり、「大日如来さま広大な智慧と慈悲をわれわれに施され、お救いください」という意味であります。この功徳は、これを誦することによって一切の罪障が除かれまたこの真言で加持された砂を死者にかけると極楽浄土に往

生できるというものであります。読み方は真下から時計廻りに「オン、アボキャ、ベイロシャナウ、マカボダラ、マニ、ハムドマ、ジンバラ、ハラバリタヤ、ウム」と読みます。

中央の十字形の大日報身真言のまんなかは胎蔵界大日如来の種子「ア」で、これから下にさがり左、上、右に「ア、ビ、ラ、ウン、ケン」と読み「大日如来さまに身命を投げ出して信仰します」という意味であります。

連絡先電話　〇三－九六九－三四四一

8. 奈良、平安時代の越谷

宮川 進

越谷市内の見田方遺跡（大成町）の年代は古墳時代後期（6世紀後葉～7世紀前葉）といわれています。「飛鳥文化、聖徳太子、法隆寺」の時代です。そのあとにつづく、奈良時代、平安時代（7～12世紀）なかばの越谷のようすについては具体的資料がありません でした。越谷の歴史は古墳時代後期から鎌倉時代まで、とんでいたのです。

しかし、その間、この越谷に私たちの祖先が全く住んでいなかったわけではありません。

市内の元荒川や古利根川のつくった自然堤防へ現在　畑地となっている）を探すと、上の写真のような　奈良・平安時代の土器の破片がみつかり　その下に集落などの遺跡がねむっていることを想像させます。　こういう土器を生活のために使っていた人たちは　いったい何をたべ、何を着て、どんな毎日をおくっていたのでしょうか。

（青色の土器＝須恵器（すえき）　赤色の土器＝土師器（はじき））

整理完了
0489
1
75
1
9137

9.

和讃地蔵

山田政信

所在地

越谷市蒲生　清蔵院

この写真は清蔵院の寺域にある地蔵菩薩立像の石仏で、寺の説明によるとなくなった子供の供養のため寄進されたものであろうと。

親に先立って死んだ子供たちが、西院（さい）の河原で石を積んで仏塔を造ろうとする、一重積んでは父のため、二重組んでは母のためと、やっとの思いで造った小石の仏塔も、入相（いりあい）の

頃ともなると、地獄の鬼が現れて黒鉄の棒でこわしてしまう。こどもたちは小さな手を合わせて鬼に向って許しを乞うて泣き叫ぶ、その泣き声を聞いて姿を現わすお地蔵さんは、こどもたちをその衣の裳のうちに入れ、みどり子をだき抱へてお救いくださる。

空也上人御作と伝えられる「西院河原地蔵和讃」を表現したもので、石仏としては非常に珍らしい構図で、地蔵和讃の心をうかがいしることのできるこの貴重な石仏を、「和讃

No. 3

此歌と標題をつけてご紹介いたします。

草加市、石工神流資、青木京義作とある。

山田政信記

連絡先TEL (03) 1 (917) 1 六〇〇四